



針葉樹會報

通卷第六十七號

夏山特輯號

劍澤夏季合宿報告

森川眞三郎

一、前書き

例年の如く六月になつて、みんな蟬が部室の周囲の雑木林で喧しく啼く様になる。夏の山の計劃が皆の間でぼつ／＼初まつた。

合宿は必ず行はなければならない。云ふ事は、理窟無しに皆承知して居た。今年は劍澤だ。云ふ事も殆ど昨年から定つて居た。斯くて話はすらく／＼運び、各自仕事を分擔して準備は進められた。

大體の要領は昨夏の涸澤合宿と殆ど同様であつて、此を標準として計劃が建てられたから、準備は割合ひに容易であつた。唯、今年度は涸澤より比較的交通不便な、又天候不良な劍澤に趣く事、假想として山小舎は無いもの。是に全然依頼せぬ事、初心者より直に、ヴァリエーション・ルートに導き、岩登り、グリセード等をさせる事、第一次全員合宿後引續いて各自縦走計劃を行ふ事、等を嚴に定めた事により多少備品が増加した。

先づ天幕は今回新しく先輩方より御寄贈の七人用ウインバー天幕二張、五人用改裝ウインバー一張、二人用天幕（倉庫用として）二張、合計五ヶであるが此のウインバー天幕は既に冬山にて試験済みで、又此の度の合宿でも連日の悪天候に拘らず、風雨に對して極めて頑丈であつた。唯支柱の重量が相當負擔になるのが缺點である。殊に簾こぎの場合あの長物はどうにも仕末がつかず、人夫そこのけの猛者連も避易する。尙天幕の底部には筵を用ひず、グラントシート二枚（中一

枚ゴム引完全防水)だけさし、偃松其の他のぼさを敷く事にした。炊事具は例により石油とラヂウス、今年は充分自信をつけたのでアルコールを携行しなかつた。

荷物の運搬方法も大體例の通りで、劍澤にて使用する一般用品、食料、及縦走用、第二次計劃食料も東京驛より配達付荷物として先發隊五名の切符により發送、之を千垣驛前杉田運送店の手を通じ、ぼつかによつて劍澤天幕地迄上げた。此を分類すれば次の通り。

1. 箱詰(雜品) ゴム引シート三枚、ザイル二十米一、ハンマー四、ハーケン十、カラヒナー四、鍋大二中一、ヤカン二、シヤモヂ、汁スクヒ、紅茶コシ各三、ラヂウス點火用アルコール一封度、ナタ二ケ、ローソク二ダース、藥品類一式、ワセリン二罐、草履三足、其他
2. 袋詰 二人用天幕二張、ザイル三十米五本
3. 5. (箱詰) 二幸にて買入の食料品
6. 9. (箱詰) 東京バンにて買入のコツペー。ジャム。

以上九個重量合計一八一斤(四八貫二百匁)

尙千垣—劍澤三田平間の運送賃銀は今年は多少物價騰貴の爲、一貫目當り五十五錢、運搬所要日數は普通の天候なれば千垣着後五日と云ふ約束になつた。併し悪天候により、荷上げ所要日數が増加しても、賃銀を増す必要は無いのである。

其の他の一般用品は先發隊、後發隊で分擔して持参した。

先發隊(五人用天幕一張、ラヂウス一、鍋中一、石油一ガロン入三、スコップ一、ザイル二十米一、ゾンメルシー一) 後發隊(七人用新調天幕二、ラヂウス二、鍋大一中一、ヤカ

ン一、石油一ガロン、スコップ一、針金、ローソク一打) 此の他各自ビツケル、アイゼン、寢袋を洩れなく備へさせた。尤もアイゼンは熟練者で持参せぬ者もある。此の他身の廻り品も極く制限して不要なる負擔を防止した。

次に食料に移る。大體之も潤澤と同様であるが、此の度は第二次計劃縦走用の分も同時に上げた。朝食には米飯の他オートミルを用ひ兩者を交互にした。晝はパン食、夜食は依然米食とした。屢々述べられた事であるが、オートツは調理簡便で早朝出發には誠に都合がよい。而も腹の持具合も相當好い。唯食べ慣れないと、食が進まない缺點がある。之もパンのかけらや、殘飯を混じ、又ジャムを添へて食べる事等により、まるで菓子様の様に甘く食べられる。重量も軽く、費用も比較的安い。一罐は普通六回分となる。尙ミルクと食鹽を忘れぬ様。次にパンであるが夏期二三週間もパンを完全に保存出来るかどうか問題であつた。東京パンの好意により之は結局無事であつた。コツペは多少黴を生じたが、小形のロールパンの如きは二十日經過した後、東京—富山—劍澤—藥師の旅を経て槍の肩に於て殆ど出来たと同じ味で食べる事が出来た。パン類は一體に密閉する事は禁物で成可く風通しよく而も、濡れぬ様にパツキンケする事が必要である。又時々天日に漂す事を要する。それから野菜であるが昨年は十二貫に垂んとする大物で大に避易したが今年は、乾燥野菜を思ひ切つて採用した。生野菜はキャベツ、玉葱、馬鈴薯等全體の約二割以下であつた。持つて行つたのは、法蓮草、キャベツ、人蔘、牛蒡、五目であるが、此の中五目人蔘、牛蒡は極めて優秀であつた。少量の生

の馬鈴薯を混ぜると、全體が生野菜の様に食べられた。重さも非常に軽く全部で七、八百匁に過ぎなかつた。唯値が多少高い。一袋一回五、六人分で十五錢である。發賣元は、京橋區木挽町一ノ六三、三晃商會。

更に、各自劔合宿用として、氷一升五合、コンビーフ一罐、角砂糖一箱、及び劔澤に入る迄の食料として、三日分乃至五日分を持參した。

以上の他に杉田運送店より、米三斗五升、味噌二貫目をぼつかの荷と共に上げさせた。

尙、前記の中、購入せる食料品の細目は煩鎖になるので省略して、會計報告の時に表示する。

二、行 動

第一次計劃 劔澤三田平合宿

參加者 柿原(O・B)、小谷部、小林、鷲崎、榎本、森

川、岩崎、原、船本、大塚、日江井、里見、宮城、高橋、木島、小泉、山田、以上十七名

七月九日 曇後大雨 先發隊、小谷部、森川、岩崎、原、船本、及び先輩のほや／＼柿原氏六名、午後九・〇〇上野發。

種々の都合から合宿に參加出來なくなつた望月、佐々木の兩名淋しく見送る。

七月十日 曇後小雨 富山(六・四〇)―ハイヤー南富山(八・一〇―八・一八)―千垣(八・〇〇)―芦峙寺(八・三〇―九・一〇)ハイヤーを交渉したが埒あかず、歩く事にきめた、途中で自動車を

つかまへ大助り―稱名手前取入口(一〇・三〇―一一・一〇)―稱名瀧下(一二・一〇―一〇・四五)―追分附近で幕營(三・三〇)天幕地は小舎の三、四丁手前向つて左手の小澤のほとりて、未だ時期が早い、全く静かな一夜であつた。邊りは美しい、いわかゞみが一面に咲いて居た。

七月十一日 曇時々晴

早朝から出發の準備をさゝのへたが、岩崎がどうも調子が悪いと云ふので中止、一日中附近を慢歩したり、慢書を畫いたりして過す。岩崎は狭い天幕を出て、追分小舎に泊る。吾々のぼつかの一隊が通過した。

七月十二日 雨

岩崎は未だ調子が悪いと云ふので、獨り小舎に残して出發(八・〇〇)―天狗平(九・三〇―一〇・一〇)―雷鳥澤下(一一・〇〇―一一・二〇)―乗越小舎(一二・一〇―一・三〇)―劔澤小舎(二・〇〇)雷鳥澤の登りで今朝未明に追分小舎を出た吾々のぼつかに追いついた。劔澤小舎についた時はざ／＼と云ふ強雨の爲め止むなく小舎に雨宿りし、小止を待つて、午後四時頃ぼつか到着と同時に天幕を張る。小舎より約百米下手に絶好のキャンプサイトを得た。未だ何處の天幕も無く劔澤は全く吾々のものであつた。

後發隊、小林、鷲崎、榎本、大塚、日江井、里見、宮城、高橋木島、山田、小泉、上野發(午後九・〇〇)

七月十三日 雨 朝少し晴れさうだったので森川、船本、原、源次郎へ向つたが一〇・三〇頃にドシャ降りとなり引返す。一一・

三〇岩崎、追分小舎よりやつて来た。

晴間を見て二人用天幕二ヶ建設、連日の雨に一同腐る。こうなるさ歸る日に追はれる先輩氏、慘たるもの。

後發隊、十一名、富山―千垣―ハイヤー稱名ホテル(二・四〇―一二・三〇)―稱名瀧下コンクリート亭露營。取入口迄のハイヤーの交渉に恐ろしく手間を取り、五時間以上浪費した。弘法へも行けず、それに雨も降るので遂にこんな始末だ。おまけにラディウスがつかない。(鷺崎)

七月十四日 曇後強雨 朝は未だ雲が薄かつたので柿原、原、せめて御山詣りにでもと出かける。他の三名は根の生えた様に動かない。案の定午後になつて二人は濡れ鼠になつて歸つて来る。柿原氏遂に明日は歸るさ言ひ出す。他の連中、俺達は之からまだ二十日も山に居るんたから、今降れば後になつてきつと晴れるさ氣休めみたいな事を云つて居るが、内心やきもきして居たたまれない。夕刻になつても後發隊姿を見せず。

後發隊、十一名、露營地(六・二〇)―弘法(八・五〇)―一・三〇―追分(〇・四五)―一・一五―鏡石小舎(四・〇〇) 荷が重いので歩速はのろく休憩時間は長い。二日間で劔澤に入る事は昨日既にあきらめて居る。下が悪くて天幕張れず、自炊で小舎泊り。

七月十五日 曇後雨

柿原氏下山、森川劔御前小舎迄見送る。彌陀原は晴れて居た。今日は後發隊は必ず來ると種々手筈をさゝのへる。暇を見て、ゾンメルで遊ぶ。雪案外多く、大いに愉快、助さん、船本等ジャンプ臺等も造り夢中になる。

後發隊 十一名 鏡石小舎(七・四〇)―地獄谷(九・〇〇)―九・三

〇―乗越小舎(一一・五〇)―〇・三〇―劔澤天幕地(〇・四五)地獄谷の邊りで柿原氏に遭ふ。種々の行違ひで携行のテント二張は遂に無駄骨。小舎を使ひ、而も三日かゝつたのは大に不満だ。凄く張り切つた者、體はへばつても氣だけは張り切つた者、すつかりへばつた者等々、十一人も居ると色々だ。(鷺崎)

三田平では直に天幕の新設、張り換えが行はれ舜く間に商大村が出来上つた。炊事掛の原、船本により飯が出来る頃ぼつと雨がやつて來て、豫定通り、指定の天幕に各自這入る。其の組合次の如し。

1 張天幕(五人用) 岩崎、原、鷺崎、榎本

2 張天幕(七人用) 小林、森川、船本、日江井、宮城、小泉

3 張天幕(七人用) 小谷部、大塚、里見、木島、高橋、山田
夜は歓迎の大コンパ、明日は休養ときまり遅くまで劔澤を揺がす。

七月十六日 雨 一同天幕滞在、小止を見てはゾンメルを樂む。

珍しくも、助さんのかけたわなに兎がかゝつた。大樺小舎に、荒澤に、カクネに致る所で失敗したが、遂に兎の愚なせいか、吾々の腕前が上つたせい成功した。兎のスープさ、ごた煮に一同舌鼓を打つ。今にコンビーフが不要になると凄い鼻息になる。天幕内の意氣軒昂ではあるが外は相變らず雨がびしょく。

七月十七日 曇後雨

早朝一同張切つて仕度をしたが、段々天氣悪くなり中止、十一時から三田平から乗越の方を見上げると直ぐ左手に、切立つて

見える別山北側の壁に、練習がてら出かけた。

A. 小谷部、山田、小泉

B. 森川、船本、日江井、宮城、高橋

C. 小林、榎本、大塚、里見、木島

三田平の背後に灰色をした小岩壁が聳立してゐるのが之である。天幕滞在の徒然なる儘に出かけたが案外手強い。最切は練習の積りで困難な所も撰んで居たが終には楽な所と些かほう／＼の態で攀る。中央部から、右寄りにかけて最も登り應えのある所で概して下部は堅いが上部は浮石が多い。人が来ない爲か途中雷鳥の巢に卵を見付けたりした。歸途別山より直に劍澤へ向けグリセードした。期待以上よい練習になった。

岩崎、原は直接別山へ登る。

(小谷部)

七月十八日 晴 夕立あり。

八ッ峯 (A 小谷部、里見、山田、小泉)

天幕(七・〇〇)―長次郎出合(七・二五)―二、三峰間(九・三〇)

―五峰上(一〇・五〇)―一・三〇―六峯(一・三〇―四・〇〇)―

七峯(二・四〇)―八峯(三・一〇)―八ッ峯頭(四・〇〇―四・一五)

―長次郎下降―天幕(六・〇〇)

ザイルオーダー、里見、小泉、山田、小谷部はオーダーより離れ指導しつつ、練習登攀を行ふ。ビギナーたる者は一箇所も馬鹿にせず、ザイルに馴染む事肝要、一見楽な所では屢々確保を不注意にし勝ちだが、こんな心構えから重大な遭難を惹起するのである。如何に陳腐さならうが八峯、北尾根はビギナーにとつて絶對の修道場たる地位を失はないと思ふ。(小谷部)

八ッ峯 (B 森川、船本、高橋、宮城)

天幕(七・〇〇)―長次郎出合(七・三〇)―二三峰間(一〇・〇〇)

―五峰上(一一・二〇)―一・三〇―八峯(五・二〇―五・四〇)―長

次郎下ル―天幕(七・〇〇)

A班と見えつかくれつ行く。森川はザイルパーティーを離れトツプの直前に行く。

五峯で猛烈な夕立に會ひ岩陰に避ける。

今日の劍岳一帯はまるで、運動會やお祭の様に賑かだ。八ッ峯だけでも四十名位ひの人が取ついた。

源次郎 (A 小林、岩崎、原。B 鷲崎、榎本。C 大塚、日江井、木島。)

天幕發(七・〇〇)―長次郎出合(七・三〇)―長次郎右峯、一番目

の雪溪の左手の岩稜より取つく(八・一〇)―源次郎上の一支部

(九・三〇)―一〇・〇〇)―戻つて下の取付點に出る(一一・〇〇)―

一一・二五)―源次郎コル(〇・三五)―〇・五〇)―劍岳(一・三〇)

―平藏谷を下る―天幕(四・五〇)

此の行は失敗に終つた。源次郎は決して、長次郎と平藏谷を區切る最末端からは登り得ないと思ふ事を以て體驗したと云へば充分である。丘稜に出るさ全くどうにもならぬギャップにぶつかつて了ふ。天を仰いで長嘆之久しうして一峯を望みつゝ引返す。時間を浪費して二峯の上へ出て了つたからアプザイルンも出来なかつた。尙鷲崎調子悪く、再び取付點へ出た所から歸幕する。

(小林)

七月十九日 快晴

クレオパトラ・ニードル（小谷部、里見、山田）

天幕（八・〇五）―長次郎出合（八・三〇）―八ッ峯、七八コル（二・〇〇）―二・四五）―ニードル頂上（二・三〇）―二・〇〇）―八ッ峯頭（三・〇〇）―劔頂上（四・二〇）―四・四〇）―平藏谷―天幕（六・〇〇）

ニードルそのものの登攀は僅々十五分か二十分位。オーダー小谷部、里見、山田。傾斜は急だがホールドよく、大して困難でないが下がぐんざ抜けて居るので確保には注意を要する。歸りのアブザイレンは十五米で樂に届く。中級程度ならば、一日で八ッ峯上手部と此處位登るのが手頃であらう。（小谷部）

源次郎（森川、船本、高橋、宮城、小泉）

天幕（八・四〇）―源次郎突端小澤出合（九・〇〇）―平藏側の支稜簾くどり―主稜上（一・三〇）―一・〇〇）―一峯（二・二〇）―三〇）―二峯（二・二〇）―コル（三・四〇）―四・〇〇）―劔頂上（五・〇〇）―五・二〇）―平藏谷―天幕（六・四〇）

今年は妙な積雪状態で多い所は相當残つて居るが又少い所はまるでない。その爲に取付の少ルンゼは瀧が出て登れず左手の簾に入り奮闘二時間やつこ上に出られた。三日間同じパーティで行動した爲、ザイルさばきも非常に巧くなつた。今日も森川は、ザイルパーティと別れて行く。

八ッ峯（A 小林、榎本、岩崎、原）

天幕發（八・〇〇）―五、六峯コル（二・〇・三〇）―一・〇〇）―六峯（二・四〇）―二・三〇）―八峯（二・三〇）―熊の岩乗越（四・五〇）―天幕（六・五〇）

快晴に恵まれて出發、五、六のコル迄アイゼンを附けて雪溪を上る。八峯から劔、長次郎雪溪は燦然と輝く太陽を受けて如何にもアルプスの中に居る様。幸福感に浸る。二、三間を登つて後からやつて來た、大塚のパーティと共に下る。（原）

八ッ峯（B 大塚、日江井、木島）

天幕（八・〇〇）―長次郎出合（八・二〇）―八・三〇）―二三峯コル（二・〇〇）―一・〇・二五）―五・六コル（〇・一〇）―二・〇〇）―八峯の頭（三・五〇）―四・二五）―長次郎下ル―天幕（六・三〇）

出發が少し後れたので道通し行く。五峯まではとてもよい道がある。それから上は多少合宿を終了し、明日より縦走計劃に移る事にする。夕方より俄に天幕撤收準備にさりかゝる。夜キャンプファイヤーを圍んでの大コンパは大に賑はひ、遅くまで時の経つのも知らなかつた。元氣のいゝ豫科生から、さんでもない餘興が飛び出す始末だつた。

七月二十二日 晴 時々曇

朝から良い天氣だ。三田平の雪も大分減つて了つた。各自手早く、天幕其の他の荷を整理して、あさをきれいさつぱりとして心を残しつ、劔澤と別れをつげた。時に九時。

A、薬師―三俣蓮華―槍―上高地

（森川、船本、大塚、日江井、里見、高橋、宮城、木島、山田小泉）

B、ザラ峠―平―南澤―水晶岳―三俣蓮華―槍―上高地（岩崎、原）

C、ザラ峠―平―針ノ木峠―大町―上高地

(鷺崎、榎本)

D、追分小舎—稱名瀧—富山

(小谷部、小林)

三、後書

以上の記録の如く、天候不良の爲、充分な登攀は出来なかつた。殊に予三、本一邊りの中堅所にまつては誠に氣の毒な程乏しいものとなつて了つた。此の點について合宿解散に當り、種々論じ合つたのであるが結局、縦走計畫を完全に行ふ事がより重要であると云ふ理由で、一部の者が眞砂澤に残留すると云ふ案は一蹴された。之は結果から見ても非常によかつた様である。前に述べたが小舎に全々頼らぬと云ふ方針は、冬山の事を考へ更に、もつと大きな登攀を考へる時極めて必要な事であるが、之も、一部分、意に反する様な事もあつたが大體成功であつた。殊に劍澤では、私と助さん以外は誰も解散の日迄小舎に行かなかつたと云ふ程の徹底振であつた。之は第二次計劃、第三次計劃にまで及ばされ(尤も費用節約と云ふ間接目的もあるが)小生如き、上野驛出發以來新宿驛に歸着する迄、二十八日間、全然天幕に泊り續けてあつた。

一體に、團體的精神は増進された様で、種々の行動は手早く行はれる様になつたが、未だ器具の取扱、其の他、登山技術上重要な種々の點で未熟の者多く、時々故障を生じた。鉈の使ひ様一つにも、氣を用ひる様心懸ければならない。併し、總體的、氣分から云つたら満點で、皆が今考へて居る事は今自分の考へて居る事であると云つてもよい程、全體の氣分がびつたりと一つになつて

居た。又豫科一、二年生の登攀技術は著しいもので、體もがつしりして居るし、これから増々自重したなら、吾が部の發展は洋々たるものがある。最後に、器具係として、佐々木、鷺崎、食料係として岩崎、等がすばらな小生を助けて非常に骨を折つてくれた事を述べて終りとします。(森川記)

劍澤合宿生活の感想

小谷部全助

昨夏涸澤に於て初めて試みた新しい合宿形式に則つて今回も行はれたのであるが恵まれぬ天候の割には大體うまく行つた様である。

今回の合宿は責任者を本科二年の森川とし、あらゆる仕事は同君並に同學年以下の諸君に依つて爲され本三は殆ど具體的な仕事には關係しなかつた。之は仰々も吾々本三が特に忙しいからとか又は長老級だからと云ふ妙な理由からでは決してなく、實に近來躍進した吾々山岳部の後退を恐れ、レベルの高調を希望した一手段として、一時的に採つた手段に外ならない。即ち、明らかに言ふならば、吾々山岳部が近代的な裝備を充實して本邦山岳界の前線に進出したのは極めて最近の事で、その主動力は明に、現在の本三を中心として居た事は否定出来ない事實であらう。而してそれ以下の學年の内には、あらゆる事に於て上の者に引ずられ、或は故意に傍觀して現在のレベルにそぐはぬ様な者すら散見される状態だつたのである。

これは團體、殊に或る移行期にある團體に於て常に見得る所であるが、此の弱點を矯正せんが爲、こゝ暫く事毎に中心的支配を

行つて來た吾々本三が手を引いて見た所以である。所がこんな意圖が表面的に解されて、團體精神にもさる様な者若干見られたのは、山岳部としては甚だ心外だったが、概して部員の参加はよく涸澤以來の吾々の主旨もよく徹底した事は喜ばしい次第である。

何と云つても今度の合宿で本二以下の者が當事者として仕事を行ひ、その弱點が、反省された事は一つの味ふ可き收獲であらう。ラディウスの不調、遅い炊事、等々の細い數々の失敗も、總て次の中堅層をなすヤンガーゼネレーションにまつて無意義ではなかつたと思ふ。

次に今度は全然初心者にも岩登りを盛にやらせたが、結果は技術的には非常によかつたと思ふ。尤もこんな事は年々の入つて來る、部員の質に對して決められる事だが、概して從來は、色々な技術のコーチに遠慮勝の嫌ひがあつた様であり今少し積極的にやつて好いと思つた。併し、飽く迄登山は着實をモットーとし、スリルを求める冒険ではないと云ふ事を徹底させればならぬ。

今度の合宿では昨夏の涸澤合宿以上に部員の氣持がしつくりと一致して居た事は實に喜ばしい事實で、此の際一層、心を引緊め精進し傳統ある一橋山岳部の方向を誤らしめない様にしたいものである。

今季劍澤合宿生活の感想

小林 重吉

實に愉快であつたと思へば足りる。思ひ出せば全く愉快であつた。天氣の悪かつた事も、苦しかつた事も、飯がうまく出來なかつた事も。天幕は新品だけに非常に綺麗だつた。解散前夜の月

明のコンパは今迄のどの夏山よりも印象深いものがあつた。豫科生の潑刺たる元氣さを見るに、來年の夏の賑やかな合宿が羨ましい様な氣がして山を下つて行つた。

「菰野菊」の讀后感

吉澤 一郎

「菰野菊」を讀んだら何んな感じがしたかそれを一つ書いて呉れと謙坊に頼まれ遠慮深い人の多い針葉樹會員のお歴々に代つて私とその役を氣輕に買つて出て了つたが、さて書かふと思つて原稿紙に向つても何も出て來ない。大體慙ふいふ本は無理に第一頁から編輯後記まで一氣呵勢に讀破して後は戸棚の中へ投り込んで鼠の好餌にして置くさ云つた風なものではない。時々思ひ出しては拾ひ讀み、拾ひ讀みでは記憶を新にしオン公つていふのはこんな所もあつたのかあんな人間でもあつたのかと感心したり吹出した。りするのがその大部分の目的なのだ。だから讀後感を書く爲めに梅干をひたひにはりつけたり、エザンバンドを巻きつけたりして徹夜までして讀みあげるなんて事は以ての外である。従つて謙坊が私にこんな事を書けと命じた事は物臭太郎たる私の性質を知つてゐる彼としては飛んでもない心得違ひと云はなければならぬ。然しこれだけで逃げて了ふのも頼まれ且つ引受けた以上餘りに卑怯だと思ふから何か書かふ。

本の出來だとか表紙や裏については藝術的素養のない自分には全然わからない、あの表の布なんかも私にはおしめのよくよく使ひ古したやつを何處かで探して來て（あの上的の方が少し白つちやけてゐる所なんか實際よく出來てゐる）それに山の如き繪をブレ

ツスしたとより思へない私なんだからてんでお話にも何もならないと思ふ。だからあの本の直接の感想は勝手に各自がやるとして私は此の本から得た中島への思ひ出を書いて置く事にする。

中島さいふ男は、或る意味で實際幸福な人間ぢやなかつたと思ふ。常識的な云ひ廻しかも知れないが吾々の様に學校を出て社會人となり面白くもない上長の命令に屈従したり話にもならない同僚達に表面だけでも妥協したりして月給を貰つて妻子を養つて行かなければならないなんていふ事は考へて見れば之程山男にまつて應はしからぬ仕事はまづないといつていゝだらう。然しこうしなければ食つて行けないし又さうするのが吾々の天から與へられた義務でもあるとするならば誠に有難た過ぎて涙も出ないといふもの、中島などは之から思ふと實際運のいゝ前世に餘程いゝ事をして來た人間なんだらう。學生時代と云へば何と云つたつて人世の花だ、殊に大學生活と來てはその花の中の花なんだから、その花の盛りの眞唯中に彼は忽焉として此の世を去つたのだ。而も彼の周圍には「菰野菊」でもわかるやうに逝つた後の後々まで常に變らぬ友情を以て常に彼を懷しんでゐる幾人かの親友がある。私は彼を幸福なりとする一面に於て自分も亦同じやうに昔と變らぬ愛情を以て私に對して呉れてゐる親友乃至先輩の幾人かのある事を無上の幸福と感じてゐる一人なのである。

吾々山男は將來といふよりも一層過去の思ひ出に生きてゐる。吾々が今日生活し得る原動力は大學生活に於ける懐しい苦しい然し又樂しかつた山旅の思ひ出にあるのぢやないか。過去にお互ひを助け合つたその追憶の故に吾々の友情は一層強く深く相結ばれ

到底第三者の之を如何とも爲し得ぬ關係に置かれてゐるものである。之を吾々は腐れ縁といふ、此の腐れ縁の故にこそ吾々は毎日の生活をそして又將來のそれを希望と光明を以て生活して行く事が出来るのである。

中島は斯る崇い追憶の中の人間の一人として此の世を去つた。私が彼を幸福だといつたのは此の意味からであつた。彼の中には唯華やかな生一本な純潔そのものと云つた生活だけしか存在しなかつたのだ。何物にも汚されずに彼はそれをそのまま、冥土への旅のリユクサツクの中へ入れて、今頃は例のニヤ／＼笑ひを浮べては北や南の裏つ側を歩き廻つてゐる事だらう。(以上)

武能小舎日記(二)

岩崎利一

○六月四日 今日も凄い位の快晴だ。朝日岳へ登らうと思ひ小舎から下つて湯檜曾川の磧に出たらもう道が分らなくなつてしまつた。一寸上流の方へ行つて見ると、本流は瀧になつてゐて、道なんか全く無い。兎に角對岸へ行かればならないので、徒渉して登り道を探す。どうもよく分らないので見當をつけて置いた尾根に向つて、無二無三に登つて行つたらそれが圖星で、割合に良い切開けを見付けた。この様な所を開いた人々の苦心が思ひ遣られる。こんな酷い道でも實際感謝せねばならない。さはいふものゝ仲々急だ。一寸木賊山の急な登りを想ひ起す。秩父と云へば針葉樹は離して考へられぬものだが、こゝにも上越としては例外的に二三の針葉樹がある。矢張り山にはタンネなどの針葉樹林が無いと淋しい。あの樹々の今頃の香はしきは何うだらう。あれほど山

の山らしさを象徴するものがあるだらうか。振り返ると武能岳はまだく高く對岸に仰がれる。下には川沿ひの道が細々と縫うてゐる。登路の右左には赤い石楠花が美しい。間も無く道は笹の中を辿つて行く。頂上はずぐその様だが行けどもくまだ上に聳えてゐる。やつと笠ヶ岳（一八五二米）に着いたのは十時半で、小舎から二時間半を要してゐた。

こゝから谷川岳連峯の眺めは恰も蝶ヶ岳から穂高連峯のそれに匹敵するであらう。真正面に芝倉澤の廣大な谷が深く茂倉岳に這ひ登り、隣りには幽ノ澤、一之倉澤の物凄しい岸壁が黝々と屹立してゐる。去年の思出深いマチガ澤もその大體が望まれて、澤の上には谷川岳が巨人の如く突き立つてゐる。目を右に移せばこれと對蹠的に七ツ小屋山のゆるやかな起伏が美しい曲線を描いて、清水峠へと續いてゐる。

さてこの山頂からは土合まで尾根通しに、白毛門シラガモンを経て四時位で行くらしい。笠ヶ岳を辭して朝日岳へと向ふと、地形が多少變り、仲々美しい所がある。寶川へ落込む谷に一杯つまつた雪溪は實に綺麗だ。暫く尾根を傳ふと、廣潤な朝日岳の頂上に着く。この池は未だ大半雪の下であつたが、雪田の消えた所からは手のしびれる様な水が奔流してゐて、渴えた喉を心ゆくまで慰めてくれた。さゝやかな晝餉も豪華な山の大觀に興を添へられて、此の上もなく楽しい。先づ右の方には上ノ原の高原の上に聳り立つ武尊山、それから左には日光の男體山から奥白根山への一脈、更に一際高く燧岳、其の手前にあるのは至佛山であらう。眼を左に轉すれば、遠く駒ヶ岳や八海山が美しい雪肌を輝かせてゐる。近く

には柄澤山やそれに續く巻機山、牛ヶ岳などが覗いてゐる。暖い這松の中に晝寝してゐながら、ふとハイザの様な心になつた。樅の木のかげ、山頂の白雪、山の猛鳥を戀ふる氣持は互に似通ふ所がある様にも思へる。

清水峠に向つて降り始めた。途中、湯檜曾川の源の上を通る。さしもの本流も、暢びやかな源流地に潤けて、楊柳を點するあたり、藥師澤を想はせて氣持良い。峠からまた七ツ小屋山を越えてスナノ／＼歩く。土樽越えを通り、夕日を浴びて薄赤く染まつた山々を打ち眺めつゝ、武能小舎へ着いたのは五時半頃であつた。

○六月五日 今日は何だが天氣模様が怪しい。しかし一日位は保つと思ふので出かける。芝倉澤の出合までは直ぐだ。澤は仲々荒れてはゐるが靜かである。少し登つて瀧を巻くと、間もなく雪が斑々出て来る。アイゼンが無いのは少し痛手だが温度が下らなければ平氣だと思つて尙ほも登る。薄日が射して而も風が無いので暑い位だ。昨日笠ヶ岳から見た様に、芝倉澤右俣から落ちたスノーブロックは物凄いいもので、雪溪の殆ど下まで來てゐる。溪は一時急になつてまた緩くなる。この所に五人のパーティーが居た。その連中が右俣を登るので僕は一人で本澤を登ることにした。振り返れば昨日登つた朝日岳方面が見えて來た。雪は日に照らされて柔く、樂に登れる。最上部はそれでも相當急で、しつかり確保して登つた。稜線へ出てから五分も歩けば茂倉岳の頂上だ。良い氣持で休んでから武能岳へ向ふ。この肩から下にかゝつてゐる雪溪を一氣に飛ばして國道に出、後は歩き馴れた白樺尾根の道なのんびり降つて行けば、吾が武能小舎は靜に夕餉の煙を上げてゐる。

た。(終)

「菰野菊」を讀んで

望月達夫

中島さんの追悼録「菰野菊」を戴いたのは、たしか二月の針葉樹會の席上であつたと思ひます。當時私達は學年試験で落着かない日々をおくつて居ましたが、その晩は早速あの青い布の表紙を開いて一氣に讀了してしまひました。遺稿中、手紙をのぞいたものは曾つて「針葉樹」の誌上で親しく目を通したのですが、又新らしい氣持で讀む事が出来ました。それにもまして興味をおぼえたのは中島さんの手紙であり、部報第二號の序文であります。そして中島さんがどれ程山岳部を熱愛し、最期迄部のことを思つて居られたかを知つて、涙ぐましい氣持にさえなりました。

追悼の文章も皆よく中島さんを物語つてゐるのだと思ひます。生前中島さんと一面識もなかつた私故に、只「菰野菊」を通しての中島さんしか解らないのでありますが、あんなにも充實した追悼文の滿載出来たのも、中島さんの生前の高邁なる人格によるのではないでせうか。殊にM氏の文章中

「今年の冬は山には登れない、と覺悟はしつゝ、冬の鹿島槍行の相談會には、必ず出席した歸郷前の君」

と云ふ一行を、私はどんなに尊敬の眼をもつて讀みました事か。そしてそれと同時に編輯をされた方々をはじめ針葉樹會員諸氏の山で結ばれた強い友情を今更の如く眼近に見て、私達山男の社會こそ小さいけれど然し無二のものだと云ふ感を深くした次第です。

「菰野菊」の編輯上の事、裝釘の事其他技術上のことにかんしては私輩の喙を容るゝ事ではありませんし、追悼録と云ふ性質上それ程嚴格な批評もなすべきではありません。只針葉樹會報第三號所載の「部室より」と云ふ一文は中島さんの面影をよく傳へてゐる様に思はれて、遺稿に漏れてゐるのがなんぞなく心残りです。はじめ「菰野菊」を現在の山岳部員全部にくださる事をお聞きした時、中島さんを知らない者ばかりなことを考へて、少し無駄なところではないかとも思つたのでした。けれ共内容を拜見してかいたゞいてをいて本當に有益だつたと思つてゐます。と云ふのは「菰野菊」を通してみたる中島さんは山岳部員として全くテイピカルな方であり、現部員に影響するところ盡大なるものがあると思ふからであります。現に豫科の連中ですら非常に興味を以て讀んだと申してゐる者がある時、嬉しく思ふのは私のみではありませんまい。

中島さんが往年山岳部をリードしてゐられた時代と、現在とでは大學山岳部のいき方も非常に變つてきてはゐますが、中島さんがかつて持つて居られた精神はすゝと一橋山岳部に傳つてゐると思ひます。如何に山岳部の外貌に變化かきても、山岳部員のもつべき精神の根底となるものは山に對する不斷の熱情と山岳部に對する強烈な愛着とに他なりません。そして山岳部に對する正しい認識と、その指導精神とは常にそれから派生するものでありませう。殊に當時の一橋山岳部としては全く劃期的なる積雪期の高峻山岳へ向ひ、常に未知の境地を求められたあの果敢なる登高精神こそは永久に私達現役が模範と仰ぐべきものであります。

此の意味に於て中島さんは永く新らしい部員の願見る可き人であり、又「菰野菊」の頁も末永く繙かる可きものでありませう。編輯氏より此の題目について原稿を依頼されてからもう一月以上たつてゐます。結局生前の中島さんを知らなかつた事等が禍ひして平凡な感想を綴つて誠に恐縮です。只今現役は全部劔澤に合宿中ですが、私と佐々木君とは「針葉樹」の仕事の爲都に残つてゐます。もう二、三日には出来上る豫定です。今夜の様な月のよい晴夜は劔澤のこのみ思はれて、學生々活最後の夏山故、いたゝまらぬ氣持です。遅れ馳せ乍ら廿四日の夜行で上高地へ赴く豫定です。(七月十八日夜)

源次郎と山伏殿

謙 坊 生

門司の荒次郎大人と堀岡氏からの手紙に今夏山に入る――とあつたり、針葉樹會の席ではコンちゃんのだ六谷行き話が出る。もう我慢出来ない。何處かへ行き度い。すると山岳部の合宿を本年は劔澤に行ふから都合つけば来いよ、と森川が言ふ。そんな譯でO・Bになりたての僕の雨の立山劔行が始つた次第なんです。出發は七月九日、歸京同十六日朝の正味六日間の山行です。だがこれ程雨にやられるとは御釋迦様でもまさか御存じなかつたでせう。凡夫の僕のこゝです。物凄く夕立の中をひたぶるに突き進む急行車の中で、此の夕立だもの明日は晴れささ佳い氣持になつてゐたのです。所が富山に着いても千垣に着いても、そして稱名、弘法を過ぎて雨が降つたり止んだりして、地降りの徴候歴然たるものがあります。そして何と六日間の山に在る間、可愛

想な僕の果敢ない望みにもかまはず、雨は莊嚴に降つて呉れました。

一行は先發隊五名と僕を加へた六人です。劔澤に入る迄の武者姿は誠に哀れを催す風情で濡れたり乾かしたり、大變なことです。時たま頭を出す藥師に、彌陀ヶ原に立つて「ハレルヤ！」と祈つたけれど無駄です。天狗平から地獄谷、雷鳥澤を経て、劔澤に入つたものゝ雨ばかり。毎日天幕の中で劔や後立、別山尾根を時々眺めたに過ぎず、岩と組む日は一日とて御座居ません。

後發隊の来る迄の準備は完了したのに、天は晴れないんですから、六人の者は無聊に苦しみます。天幕の中ではザーと来る雨をかこつて無精者の連中がお話をしてゐるんです。皆さん、その様子は大概御想像つくと思ひます。面白い様で内容は出鱈目のお話しばかりなんです。

その中に山伏の話が始まりました。彼は山伏に育つた様に生れて来たさしか思はれない魁偉な體軀を持つてゐた山伏です。その大人は稱名の瀧以來僕達と追ひつ追はれつ登り來つたのでしたが、太い木の根で造つた杖を持ち、彌陀ヶ原をシンズ／＼と歩つてゐました。然し何と申しますか、その偉風堂々たる御姿に一脈の雅味を漂はすのは、妙なものが大人の越中の蔭に見えつ隠れつしてゐることなんです。無頓着な山伏殿はそんな事は平氣の平左衛門で、時折霧の中からブーと法羅貝を吹き鳴して軍艦の様に突進するんですから耐りません。天幕の中で思ひ出した様にその話が始りますと、一同中學生の様にローと歡聲を挙げました。

ところがその山伏先生と再び相見えろの機が到來しました。劔

澤の中には白霧濛々として立籠め、白山いちげの花が水滴に濡れて雪溪の傍に咲いてゐた日です。別山の上の方から聞き覚えしプー／＼が響いて來ます。その時スケさんと僕は源次郎の小舎に行つて居り、爐側で煙草を燻してゐました。するさ間もなく降りしきる雨の中をヒョククリ小舎の前に立出でたのは、何とその山伏殿だつたのです。

彼は盛んに劔の話をしてします。劔は物凄く瘦尾根で切り立つてゐて、そして劔は小舎の向ふだと別山の方を指したんですから源次郎爺さんは黙つて居られませんか。「劔はあつちだけに。お前様登つたは別山だ」さやつたもんです。山伏殿ボカンとして源次郎を見つめたまゝ、凡そ十秒間位啞然としてゐました。劔澤の谷は霧に閉され雨はザーと降つてゐます。

山伏先生はそれから晝飯にありつきます。そして靈驗妙なる修業の話をするんです。愉快なのは別山の上で彼が味つた靈妙不思議な體驗談です。彼は雄山神社を發してその日別山に來ました。雨が降り霧に閉されてゐます。彼は法羅貝を吹き鳴して別山の上で行を修めたそうです。するさ遙か黒部の谷の上に充つる白霧の中に祈りの甲斐あつてか五色の雲が見えて來ます。オ、と彼は驚喜したそうです。彼の五色の雲の裡にぞ靈驗正に立ち現るべしと彼は天を仰ぎ地に伏して祈りました。だがニヒト・ノイエス、見えるのは依然五色の雲だけでした。彼は我が力これにても足らざるかと尙も祈りました。然し五色の雲だけが依然として見えるだけです。遂に彼は目をじつと閉ぢて荒行し、その甲斐あつてぞ五彩の雲中神々しき阿彌陀如來の御姿を仰ぐことが出來ました。

彼の曰く「目をとちなきや、よう見えやせん」さ。

源次郎爺さんはそれ迄立つたまゝ、鉢巻をして黒無地の襦袢を着てゐた姿を僕等の方へグルリと向けて、「何だ目をつぶりや好いのか」さ一人ごちするんですから、それを聞いたスケと僕は可笑しくて耐らないんです。枯木の様に淡泊、超然たる源次郎にかゝつては、別山頂上荒行の山伏殿も確かに役者が一番下です。やがて彼は源次郎に教えられるまゝ、やをら立ち上り雨中劔に上らんとして小舎を發ちました。プーと豪快な音が程なく劔澤一ぱいに響き渡ります。軍隊劔迄でも行きましたか、その後の消息は聞きません。

これは劔澤滞在中一番印象深いことでした。四日間此處に居て皆雨ばかり。何處にも登らず十五日の日に懐しい部の人々と天幕に別れました。お別れに寫眞を撮つたり、源次郎爺さんは孫を連れて小舎の上で手を振つて呉れるし、森川が御前小舎迄送つて來て呉れたりして誠に別れは辛かつたです。雷鳥澤は一氣に降り、地獄谷三丁目以後發隊一行に遭ひその日の中に富山を發ち上京しました。富山驛に立つた時、一脈の淋しさの中に（これをO・Bの悲哀とでも申しますか）やはり山に來て佳かつたと思ひました。雨は依然として降つてゐました。（一九三七・八・八）

山岳部報告（七月）

日誌

○定期部員集會 七月二日（金） 於本科部屋

出席者（本科十名、豫科八名）

合宿の参加者を確定の後、先發隊と後發本隊との聯絡を取つた。

記 録

(1) 劔澤合宿（七、九—七、二一）

是については別項の報告を参照下さい。

(2) 薬師岳より上高地へ（七、二一—七、二七）

森川、船本、大塚、日江井、里見、木島、宮城、高橋、小泉、山田、テントに依り、全員十名一體となつて縦走した意義ある記録である。次にその概略を摘記する。

七、二二 劔澤よりザラ峠を経て五色原幕營。

七、二三 五色原を通り、スゴ乗越を越えて薬師岳肩泊。

七、二四 薬師岳を越え、酷い夕立に見舞はれて五郎岳小舎幕營。

七、二五 五郎岳を越えて、黒部の源を眺めつゝ、双六池にて幕營。

七、二六 愈々槍ヶ岳に到り、小槍をも極めて、肩附近に泊る。

七、二七 待望の上高地目指して降り、夕刻五時に小梨平へ着く。

(3) 烏帽子岳を経て上高地へ（七、二一—七、二六）

原、岩崎

七、二二 久し振りの蒼空を喜びつゝ、黒部平小舎へ入る。

七、二三 東澤は増水で入れず、南澤を登つて烏帽子小舎へ入る。

七、二四 坦々たる尾根筋から赤岳の登りにかゝる頃夕立が來た。

七、二五 水晶小舎から槍ヶ岳を越えて、大槍小舎迄來て泊つた。

七、二六 天氣は良く無いが、この日の上高地入りは良かった。

(4) 針の木越え、大瀧山越え（七、二一—七、二六）

鷺崎、榎本
七、二二 テント班と共に五色原で泊つた。夜は月が美しかった。

七、二三 針の木峠を越えて一氣に大澤小舎へ行つて泊る。

七、二四 大澤小舎から降つて大町の對山館で泊つたが暑い。

七、二五 下界は暑いので、再び山へ舞戻るべく、大瀧小舎へ。

七、二六 大瀧山を降り小雨の中を上高地へ着いて、友に會つた。

(5) 上高地生活（七、二五—八、六）

望月、小谷部、佐々木、森川、鷺崎、榎本、原、船本、岩崎、大塚、日江井、里見、宮城、高橋、木島、山田、小泉、他部員外二名。

比較的天氣が不良なために、多くは望めなかつたが、その大體を記するならば、

七、二五 望月、佐々木、東京より來り、小梨平に大テントを設く。

七、二六 原、岩崎は槍ヶ岳より、鷺崎、榎本は大瀧山より到着。

七、二七 明神岳へ佐々木、榎本行く。夕刻薬師よりの縦走班來り、テントを増設す。森川、船本、大塚、日江井、高橋、里見、宮城、木島、小泉、山田入幕。

七、二八 佐々木、鷺崎、船本は西穂高岳へ、原は焼岳へ。

七、二九 本日迄に九名歸京し些か淋しくなる。森川、佐々木霞澤岳へ向ひしも、雨のため二俣より引返し、ホテルで休憩する。

七、三〇 午後小谷部關西より來る。夕刻孫人を招じ夜迄痛飲す。
七、三一 船本、大塚歸る。西糸屋で大阪商大の五氏と會談した。
八、一 小谷部、望月、森川、佐々木、日江井 奥又白へ向ふ。
八、五 奥又白谷より歸幕。翌六日整理を濟ませて歸京す。
(6) 奥又白生活(八、一—八、五) 小谷部、望月、森川、日江井、天候に恵まれて、北尾根四峰フェース、前穂高岳直登、明神岳等の豊かな登攀を行ひ得た。

記 録

○蓼科山(八月八日 晴) 中川、林

二次式火山の此山には五合目邊を環狀に取巻く密林のテレスがあるのが面白い。頂上の岩海は奇觀だ。大河原峠は實にのんびりとした氣分のいい、ゴルフリンクになりさうな處だ。二子池は二面の明鏡の様に黒木の間に静もり返つて居る。一日の汗を親湯に流し夕風渡る高原をバスにゆられて行く頃蓼科も八ッ岳も夕暮の雲につつまれてしまった。

○和田峠・三峰山行 八月十五日(晴) 山口稔一、鈴木英雄

下諏訪驛—(省營自動車)—和田峠東餅屋—三峰山—屏峠—屏鏡泉—中入—(乗合自動車)—松本

和田峠を経て丸子へ行く省營バスは汽車に連絡してゐるので時間を無駄にしないですむ。下諏訪から東餅屋迄五十分。料金四拾錢は安い。

中山道をグン／＼登つて窓外の景色もよし、夜汽車の寢不足をさりかへすにももつて來いである。

東餅屋から三峰山への尾根へ登りきる迄は、つまらぬ突起があ

つたり、藪が深かつたりして閉口だが、尾根へ出てしまへば後は之只茅生の連續で早春、晩秋の頃ならば心地良く微風に送られて實に最適の散歩尾根である。

但し八月中旬快晴の日に歩く所ではない。完全に照りつけてさすがのアンチチャンが口もきけなくなつてしまつた位だから大體御想像も附かう。

屏峠の北には茶臼山、美ヶ原、王ヶ鼻等々美しい山脈が續くが日曜一日、務めの身では少し無理らしい。

消 息

矢作太郎君 今般丸善株式會社企畫課勤務を命ぜられし由。

河相 藁君 歸朝しありし同君は、七月九日の大安日東京會館にて華燭の典を擧ぐ。新婦はロンドン仕込み、春子様と申し既に御兩人は濠洲行きの由なり。

關 守三郎君 獨乙より歸國しありしも、既に滿洲に轉任されたとか。未だ詳報に接せず。

打橋壽郎君 東京市大森區新井宿六丁目四四四番地へ轉居。

定例集會 八月十三日 於如水館

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、近藤、久保田、金田、清水、林、新羅、柿原、(部員) 望月、小谷部、森川、原、日江井 暑中の例會さて食堂で一同晚餐を共にし、相變らず山の話に餘念がない。後新館一階にて雜談、森川より山岳部員夏山合宿艱行につき報告を受く。

會員名簿發行 六月中には發行する豫定の所大變に遅れて了ひましたが、既に御手許に届いてゐるさ存じます。尙學生の方の

原 鐵三郎 目黒區中目黒二ノ五八〇

と御訂正下さい。